



# 見沼小だより

平成29年度第6号

平成29年10月3日発行

TEL 048-663-7342

FAX 048-663-9887

学校教育目標 「仲良くする子」「元気な子」「考える子」

## 天高く

校長 大澤 淳

涼しい秋晴れに恵まれ、盛大に運動会を実施することができました。ご参会の保護者の皆様、地域の皆様、ご協力ありがとうございました。2学期に入り、早い時期から運動会に向けて各学年やブロックでは練習が続けられてきました。時間をかけて日に日に仕上がっていく各学年の出し物。それとともに子どもたちの団結力や仲間意識がどんどん高まっていき、運動会当日の本番では、意識を集中して、みごとに完成された演技を披露することができたと思います。子どもたちはたいへんよく頑張りました。ご家庭でもぜひ褒めてあげてほしいと思います。

さて、いよいよ秋も本番で、朝晩はしっかり冷え込む時期となってきました。運動会のあとは読書月間、そして音楽祭、そしてマラソン大会、駅伝など、秋を代表するような行事が続きます。この季節に必ず思い出す故事が「天高く馬肥ゆる秋」です。天高く澄んだ秋空のもと、馬たちがたくさん牧草を食べて、ゆったりと過ごし肥えてゆくような様子が目に浮かびます。「でも、もともとは違う意味だったのですよ。」と昔、社会科の授業で教えていただきました。それは秦の始皇帝や万里の長城を学習する中学校の歴史の一単元でした。故事の中の「馬」は、北方で遊牧生活を営んでいた騎馬民族をあらわしていて、北西部の農村では「収穫期を迎える秋になると、北方から肥えた馬（騎馬民族）が秋の実りを略奪に来る」というとても恐ろしい警告の意味だったということです。今でも「秋高馬肥」や「天高馬肥」の熟語は残っているそうですが、意味は「澄み切った爽やかな秋空で気持ちのよい天候」として、現在の私たちの使い方と同じ意味で用いられているそうです。正反対に近い意味で使われるようになったこの故事に、驚きと面白さを感じ、しっかりと記憶に残りました。

先日の新聞で、「存亡の危機」や「足下をすくわれる」は本来、「存亡の機」、「足をすくわれる」というのが正しい表現であると載っていました。また、本来と異なる使われ方が8割を超えているものもある（文化庁の国語世論調査：埼玉新聞）という記事でした。あわせて「言葉は時代とともに変わる。本来と異なる使い方が一般的なケースもあり、それらを全て誤用と断じることはできない。」という文化庁の発言も載っていました。確かに言葉は、以前は使ったけれど今では死語だなど感じるものや、時代とともに生まれてくるものもあり、辞書などでも「正しいとされる用法」と「注意を要する用法」などに区別されている場合もあるようです。「全然」など、以前は「全然～ない」の否定語として習いましたが、今では「全然、大丈夫」もかなり使われていて、以前は多少違和感があった私も、今はときどき使うようになりました。なんでも明治から戦前あたりまでは、こちらの肯定的な使い方が正しいとされる用法だったそうです。このような現象もまた、「天高く～」の故事のように時代とともに変化する面白さだと思います。

言葉を学習する小学校の国語の週時間数は、低学年が9時間（1年生は8.7時間）、中学年が7時間、高学年が5時間とさまざまな教科の中で最も多くの時間が充てられています。言うまでもなく、すべての教科や生活・文化の根幹であるという位置づけです。その国語の授業の中では、しっかりと言葉の本来の意味を学習し「正しいとされる用法」の定着を目指します。その上で、変化していく言葉を理解し、対応しながら、言葉の面白さや奥深さに親しみを感じてほしいと考えています。

本校は昨年度より「国語力向上の研究校」の指定をいただき研究に取り組んでまいりました。本年度は1月に、その研究の成果を発表する場を迎えます。